

高校生が選ぶ特別賞 受賞

徳島県立徳島商業高等学校

高校名	徳島県立徳島商業高等学校	所在地	徳島県徳島市
団体名	ビジネス研究部		
活動タイトル	カンボジアの食を守ろう！～希望の工場建設プロジェクト～		
活動の分類	授業の一環 高校の有志	授業の課外活動 校外の環境活動団体	生徒会委員会 その他 <b>クラブ活動</b>

<環境活動>

1. 活動のねらいとこれまでの活動（テーマ、ねらい、きっかけ、昨年度までに行ってきたこと、その成果など）

活動のテーマ

カンボジアの食を守ろう！～希望の工場建設プロジェクト～

ねらい

カンボジアでは、「食べ物に異物が混入していることが日常茶飯事」であったり、「野菜を農薬を落とすための洗剤で洗浄する習慣」があったり、「ゴミはどこでもポイ捨て」する人が多かったりと環境や衛生の意識が低い状態である。

そこで、衛生的な商品開発を両国高校生で行うことにより、学校全体の意識の向上につなげていくことをねらいとする。

さらにその結果として、カンボジアの学校運営の一助につなげていきたい。

きっかけ

東日本大震災の被災地支援活動を行っているときに、日本の支援が国内向けに変わってきているとの情報を得た。商品開発などを行っていた徳島商業高校は、カンボジア プレイベン州にあるカンボジア-日本友好学園の支援者から「学校運営を継続するため、教育力を活かした収益活動ができないか？」との相談を受けた。同校は日本の支援金で設立され、運営の多くも支援金に頼っている学校だった。

そこで、徳島商業高校ビジネス研究部(校内模擬会社ComCom)は、商品開発のノウハウを教えながら、一緒に学校運営費の一部を得ることを目指すプロジェクトを進めることに決めた。

昨年まで行ってきたこと

共同商品開発を行い、運営費の一部を販売利益から捻出したいという思いでプロジェクトを4年前に立ち上げた。昨年までに数品目(ふれんじゅう やし砂糖アイスなど)のレシピが完成。イベントなどで販売し、利益を上げ教員3名を雇うことにも成功した。しかし、カンボジアでは環境意識や衛生意識が低く、連携(OEM)できる食品加工工場がなかった。

これまでに、商品のレシピ開発までは今までの活動で成功した。しかし、カンボジアでは、環境や衛生に対する意識が低く、商品の製造を委託できる工場がないという問題点に気づいた。

そこで私たちは、「日本の衛生レベルの食品加工工場を建設する」という目標を立てた。そして、様々な問題点をクリアしながら本年12月工場の落成式実施まで辿り着くことができた。



## <環境活動>

### 2. 活動の詳細（今年実施した内容、手法、着眼点、地域との連携、協力・協調など）

カンボジアの学校（カンボジア プレイベン州 カンボジア日本友好学園〔以下 友好学園と記す〕）の運営サポート

- ・カンボジアの高校生と商品の共同開発  
（カンボジア珈琲アイスクリーム カシューナッツアイスクリーム）
- ・カンボジア日本友好学園内に食品加工工場建設に向けた準備
  - ・資金調達の企画書作成
  - ・工場設計図の考案（建築士指導の下）
  - ・HACCPの学習（工場設計図の変更）
  - ・工場模型の作製
  - ・GlobalGAPの学習（現地農家との連携）
  - ・工場内機器の配置図の作成
  - ・工場建設におけるSWOT分析
  - ・各商品のQC工程図の作成（Quality Control）JICAの事業に応募し、昨年11月に工場建設資金を獲得、今年の11月に食品加工工場が完成。
- ・国際展示会への共同出展 2016年12月15日～18日  
（カンボジア ダイヤモンドアイランド）  
共同マーケティング調査 衛生意識向上研修  
2016年7月10日～13日（カンボジア イオン他）  
2016年10月20日～11月2日（徳島 J2サッカー会場 学校での清掃の仕組み、工場での衛生研修など）
- ・これらの活動と共に日本研修で学んだことを活かし、学校全体でゴミ拾いの活動開始 平成28年12月～（学校朝礼の時）
- ・月2回程度のテレビ会議

### 3. 活動の成果（今年実施した活動の成果、影響、目標達成、改善度、情報発信など）

私たちとの連携により、カンボジア日本友好学園で商品開発チームが発足し、年々成長している。活動の行き違いを起さないうえ、月2回程度のテレビ会議、2日に1回以上のSNSでの意見交換を継続している。このチームはここ2年、カンボジアで実施されている高校生日本語スピーチコンテスト団体部門優勝を飾った。この2年間に、特産品として完成した商品は販売や調査活動を繰り返し、販売収益を得ることに成功。2年前は2名、昨年は4名のティーチャーズサポートを寄付し、雇用した。また、ロゴマークの商標を取得した。カンボジアの高校生に商品開発のノウハウを伝えるため、出版社の許可を取り商品開発の教科書の翻訳のサポートを行い、クメール語版の教科書が完成した。販売活動ではお互い言葉が通じず、商品の説明をするときなどに困ったこともあったが友好学園の生徒と協力をしながらマーケティング調査など様々な活動ができた。工場建設においては、活動の詳細の通り様々なことを実施したが、工場をHACCP準拠にするためには、「人の動き」以外に「ものの流れ」や「空気の流れ」まで考えないといけなかったため、設計を考える事がとても難しかった。模型を作りながら、設計士の方や専門家の方に指導してもらいながら作成した。学校での清掃活動は、カンボジアの生徒たちは「掃除は格好悪い。」という思いがあったため、なかなか取り組み始めることが難しかった。3年研修を継続してきたが、研修参加生徒以外がゴミ拾いを行うようになるまでには時間がかかった。食品工場が建設される流れとなり、日本研修参加者から清掃された学校の良さが、伝えられ「ゴミはゴミ箱に」「落ちているゴミを拾おう」ということがスタートできた。

#### 徳島地域での周りの変化

学校全体が、カンボジアとの繋がりを強く感じ、ボランティアや地域貢献に向けた活動をしたい人が増えた。学校には地域創生委員という新しい生徒会の中の委員会が発足し、60名が参加。私たちビジネス研究部にも、取組に参加したいという生徒が25名も新しく加わった。徳島の近隣の学校もカンボジアとの連携を希望し始めたほか、県内のいくつかの企業も、カンボジアへの進出や連携を始めた。昨年はカンボジアで行われている日本大使館主催のイベントに徳島の阿波踊りが参加し、カンボジアと徳島の相互協力や相互理解が深まる橋渡しのような役目を私たちが果たしている。

## <環境活動>

### カンボジア地域での変化

今回、活動の中心であるカンボジア プレイベン州は特産品がほとんどなくカンボジアの中でも貧しい地域のひとつである。この地域は、今回の商品開発を学ぶ点について国のモデル事例として広がりを見せつつある。カンボジアの教育省 長官(日本での事務次官級)以下、カリキュラム開発の部長の方々が今年2月には徳島を訪問、徳島商業高校を中心に専門高校を視察された。

また、プレイベン州では州知事の指示により、友好学園をモデルとして清掃の習慣化(友好学園は食品開発を行うため、衛生の習慣を徹底している。)が起こってきている。今年1月に行われた工場起工式では、在カンボジア日本大使やカンボジア教育省長官、徳島県教育長などが参列し、日本とカンボジアの友好の架け橋として注目されている。

## 4. 活動からの学び (今年実施した活動を通じて学んだこと、今後の計画や目標など)

カンボジアでの調査活動や友好学園の生徒と行った日本での販売活動などではお互い言葉が通じず大変なこともあったが、両校の生徒同士で現地の言葉を教えあい、協力しながら活動ができた。

この活動で笑顔や姿勢といった基本的なことも大事だが、相手をよく観察することも重要だということがわかった。価値観が違う人たちの中で自分の考えやしたいことを伝え、情報を収集する力がとても大切で重要な能力だと感じた。

友好学園のメンバーは、最初何も知らなかったが、会うたびに成長しており、私たちも気を引き締めて活動していかないと追い越されると感じた。

工場建設の準備活動では、JICAが国際協力の事業を作る際に作成するPCM(プロジェクト・サイクル・マネジメント)やPDM(プロジェクト・デザイン・マネジメント)の手法を学ぶことができた。また、HACCAP、Global GAP、各商品別QC工程表の作成、実際の工場製品の原価計算などを行う中で、授業で学ぶ以上のことを多く学んだ。

今回の活動の中では、私たちが普段会うことができないような方々(日本:消費者担当大臣 長官 県知事 在カンボジア日本大使など カンボジア:在日カンボジア大使 カンボジア教育省大臣 長官 プレイベン州知事など)とお目にかかる機会をいただいたり、応援メッセージをいただいたり私たちの活動が国と国とを結びつけかけになりつつあることを感じた。

私たちは、東日本大震災への支援活動、Googleと連携してのHP作成支援活動、淡路島伊弉諾神宮のプロデュース活動、美波・牟岐など県南部の観光開発活動と多くの活動を同時展開で継続している。

平成25年からは、カンボジア-日本友好学園と連携した活動を行っている。平成26年度には、ホー・モニロットカンボジア特命全権大使が徳島商業高校に来校され、応援メッセージを頂いた。そしてこの2年間は、それぞれ3,000ドルのティーチャーズサポートを集め4名の先生を雇用、学校運営に貢献することができた。

今回この活動を通じて、異文化の中で現地の社会と直接ふれあい、活動を行うことにより、将来ボランティア活動を行う際に必要となるコミュニケーション能力を磨き、現地の方とともに現地で求められている商品を提供できるような人材になる第一歩にしたい。

高校生1人にできることはあまりないかもしれない。しかし、自分たちで描いた未来を仲間とともに目指すことで、自分たちが望む未来を実現させることができる。そして、両校の絆を大切に、お互いが笑顔になれる大切な人が嬉しくなるそんな輝かしい未来を実現するため、これからも国を超えて同じ夢に向かって頑張っている仲間とお互いが成長できるような関係を築いていきたい。

以上